

鹿見島寿蔵

浅野まり子

みほとけの半跣はんかのすがたおのづからみち
たらはして世を超えたまふ

『茉莉花』

蓮華草あかむらさきの遠がすみ十年を
経て母の国に来つ

『とよたま』

たちばなは紺のやうなる茂りにて蕾の真
玉時を得むとす

『古代祭場』

鹿見島寿蔵。一八九八年（明治三十一年）十二月十日生、一九八二年（昭和五十七年）八月二十二日逝去。八十四年の生涯だった。

『日本語大辞典』には、人形作家、アララギ派の歌人、福岡県生まれ、独自の紙粘土かみねんどによる紙塑人形しそじんぎょうを創作。重要無形文化財保持者（人間国宝）、歌誌「潮汐」主宰とある。

つけ加えれば、生涯に二十五冊の歌集をもち、人形かたがたに関する著作もあり、また書もよくした。三十歳より十年に亘わたって、「アララギ」に歌壇風聞記を執筆。一九四六年には関東アララギ会を結成し「新

泉」を編集発行。「アララギ」の再興第一号の編集発行にも関わった。即ち、人形の制作と、短歌、二つの道を究めた人生であった。

昨年、生誕百年の鹿見島寿蔵展（人形、絵画、書）が開催された。

人形と作歌の学び始めはほぼ同時期。十五歳、福岡高等小学校卒業と同時に、校長の勧奨により人形の道に入った。また、牧水ぼくすい、啄木たくもくの歌集を読み、作歌を始めている。

冬空のふかく曇りてありければ山梔くちなしの果

は黄いろかりしか

『魚鱗』

青白き瓦斯のひかりのもとにある西洋花
のかをりは立つも

同

一くれの粘土ねぼつち買ひて秋のあめさむけき宿
にかへり来れり

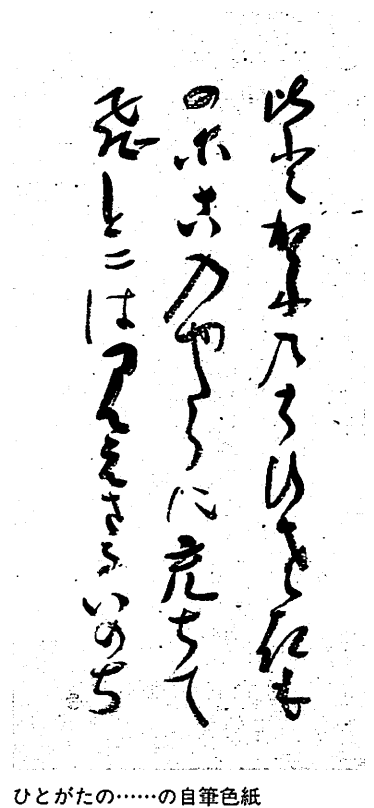
同

第一首は十五歳の作。後年を思わす感覚の牙きばは天性のもの、後の二首も初学の作。粘土はテラコッタ（硬質素焼き）の材である。

十八歳より「アララギ」を購読。福岡市内の短歌誌の同人となり、編集・発行もした。一方で、四年間、博多人形の技術を学んでいたが、二十歳の秋、彫刻を学ぶべく上京、テラコッタを制作するかたわら、本郷洋画研究所に通い、基礎の勉強に怠りがなかった。へまはだかのをみなご立てり灯のもとにわれらだまりてテッサンをする」はその日々のもの。

一九二〇年、二十二歳で「アララギ」に入会、月一回の面会日に、島木赤彦の指導を受けるようになった。この赤彦に師事したことについて寿蔵自身のことば「大正九年の冬に『アララギ』に入り、島木赤彦先生の指導を受けるやうになつてからの傾向は、一見してすぐわかるやうな地道なものとなつてゐるが、我侭なところのなくなつていつたことは、他から見たら何ういふことになるのだらうか。つまり師法一筋に繋がつてこつこつ努めるやうになつたことが自分を殺してしまつたか、何うか。多分一応自分を殺した結果となつてゐるだらう。しかし私は其のため悔いるところは全く無く、基礎的地力をつけられたといふことで唯々感謝してゐる」と初学時代の歌集『魚鱗』（一九五二年刊）の後記で述べている。入会以来の師風と自身の資質との矛盾を三十三年後に始めて述べたのであった。齟齬の思いを押して、ひたすらの「師法一筋」しかも感謝をもつてというのは、これはこれで真実の心であらう。しかし、この述懐を裏側から読むと、当時のアララギ、特に赤彦の、いわゆる鍛錬道に、若い寿蔵が苦しみもし、批判をもつた時期もあつたらうことを思わせる。師と弟子という縁、そして時代が人、歌に及ぼす影響の深さを思うが、五年余を師事した赤彦歿後、土屋文明を師とした時期を

鹿 児 島 寿 蔵



ひとがたの……の自筆色紙

経て、自身が確立してゆくに従い、造形作家らしい、繊細な、気品のある、しかものがやかな作風となつてゆく。特に紙塑人形創作や、故郷の母をうたうときの純粹な詠嘆は人の心をうつ。戦時下の険しい世にも自身の道を究めつつ歌い続けた。

ひそまりて己堪へつつ紙塑のわざ成しと
げし日も今もまづしき

「茉莉花」

寧樂の代の女わらはの裳をさだめかね歎
きてわれの飯へりにけり

同

ひとがたのちひさきものにこのやうにみ
ちてひとにはみえざるいのち

「青墨」

粗土のいきづく土のひた土に指紋のこり
て掌上仏は成る

「古代祭場」

ひとりゆくほかに道なきか此の夜半も工
房にありて下図を描く

「やまぼうし」

妻逝きて子が継ぎ其の子また継ぐと吾が
紙塑三代にわたらむとする

同

寿蔵の人形への思いが如実に示されている。それは習作時代から円熟期まで終始変らぬひたごころなのだ。一度でも寿蔵の人形をみた人は、人形がこうまで人の心を浄化させるものかと思うだろう。

「茫然自失するほどの感動」と表現した人もある。寿蔵にとつて歌と人形は一体のものであった。小さなものに大きな生命を宿らしむること、それが人形作家としての誇りであった。自身を人形つくりと称し、また「職人」ということを大切にした。短歌では、三十一音律という短詩形本来の性質として、格調の高さ、深さ、濃やかさが要求される。形式は小さくとも、作品によっては感動の振幅は意外に大きく伝わるものだとも述べている。人形の裳のいろを定めるのと、歌言葉を選ぶのと、寿蔵にとつては等しい自己の思いの追及だった。

日本に世界にいまだ聞かざりき舌頭触読 のきびしきまなび

「帰り来て」

第七歌集の『麦を吹く嵐』は、一九四七年疎開地、埼玉県熊谷にあつての日々を歌った作品集であるが、活字本出版に先立って点字歌集として刊行、草津療養所（当時）の潮汐会員に贈られた。

その経緯は、ハンセン病のため、視力障害に重ねて、指先麻痺のため点字をさぐれなくなった会員が、自身で書物を読みたいと、感覚の鋭敏な舌の先で点字本を読む方法を習い覚えた。文字通り、血の滲む努力に感動した寿蔵が点字訳（関係者の奉仕による）の歌集を会員個人個人に贈ったのであった。これは知る人ぞ知る、すぎたことではあるが、寿蔵という歌人を語るには欠かせないことである。ハンセン病隔離病棟（こんな必要がとうにないことは分つてい

ながら、癩子防法はつい先年まで存続、罹病者を苦しめ、完治者の社会復帰を妨げた。）を度々訪れ、同じ床に座つての短歌指導や、点字歌集の寄贈は、彼の人間性からであり、自助努力する人への限りない愛（こういういわれ方を好まない寿蔵だが）を示す。

また、戦後の東京裁判のため、スガモブリズンに収容されたいわゆる「戦犯」のため、定期的に歌会を指導した。私も一度同道したが二十歳の強烈な印象として記憶に残っている。

めしひにし祖父の死も記憶にとほきいま
母の眼病のながきを憂ふ

「やまみづ」

見えぬ目ににじみし涙母はぬぐふまれな
るあひに言葉すくなく

同

蚊帳のそとを青く流るる光あり蚩は毎夜
くると母のいふ

同

朝谷のかぜにまぎるる河鹿のこゑめしひ
の母とふたり聴きにき

同

両眼のめしひし母の膝におくその手のか
たちいふべくもなし

同

寿蔵の母、ナカは一九六五年、八十五歳で亡くなった。若い日に、長男である寿蔵の上京をむしろ促して送り出した気丈な人であった。戦中戦後の栄養不足が因で、敗戦後まもなく失明、しかし歎くことなく、静かに手仕事をする母であった。寿蔵は帰郷の折、末弟夫妻と暮す母を見舞うたつた。やがて老が進み、暗黒の世界で静かに座っているのみの母を詠うことになる。あたかも童女、寿蔵の理想

の人形に通じる姿である。自身、「膝ひざにおくその手のかたち」は造型的な盛り上りと見えないであろうか、と随想集『人形と歌と』で述べている。後年、自選集『ははのくに』を刊行、故郷を思い、母を想う真情が、背景の筑前秋月ちくぜんの山水と溶けあつて美しい抒情をなしている。

地下足袋をはきてゆきます君のうしろ日
差きよかりき埃かぜ吹きて

『ひなげしの波』

傾命の君の心はまことありと感動し誓し
て帰りきたりぬ

同

こまごまとをみなのことをいふ君の老顔
はかがやく冬の日向に

同

「地下足袋の君」は、斎藤茂吉さいとう しげきち。「昭和二十四年二月七日、斎藤茂吉氏より招かれ、代田の笹山にて談合誓約せしをりのことを詠みたるもの。其の十六首は、昭和三十八年七月より十一月まで『斎藤茂吉・愛の書簡』が雑誌『小説中央公論』に発表されし故、秘稿の禁を自然的に解かれたる結果となりたり。——略」の長い詞書のつく一連。真偽はさておき、今は明らかとなつた永井ふさ子とのことを打明けられた日の茂吉の姿である。勿論もちろん当時は秘すべきこと、茂吉の寿蔵への信頼が伺われる。へかかはりを否定せぬ君もいぶかしむ生れし子ども実在するやと、へ老の君がきよけき恋も戦争の経過とともにうつろひけむかなどあつて、俗な興をそそられもし、事情わけを惟ただるのだが、まさに歳月が過ぎ、人過ぎたりの感が深い。

一九六一年三月、六十三歳にて重要無形文化財保持者、一九六七

蔵 寿 島 児 鹿

年には紫綬褒章受賞。翌六八年、第十三歌集『故郷の灯』により第二回追空賞ちゆうくうを受けるなど、人形、短歌、ともに円熟の域にあつた。宮中歌会始の選者を十年に亘つて拝令。四照花会染筆展よまばやし（木俣修、佐藤佐太郎、橋本徳寿、鹿兒島寿蔵を四枚の花弁をもつ四照花の花に因んだ）を開き、また各地の万葉歌碑に揮毫するなど、これまでの暮しに加わる多忙さであつた。それは老に向かう、



寿蔵夫妻と、孫たち（昭和36年ごろ）

鹿兒島夫妻にとつて過酷な活動を強いられるものでもあつたらう。

ひとりしづかふたりしづかの冬ごもる庭
の日向は黄なる萩から

『故郷の灯』

赤壇の斜面向きあふ道すぎて冬の小鳥の
冴えわたるころ

同

寿蔵の生涯で最大の痛恨事は、妻やすほの急逝であらう。一九七五年一月十四日、午後八時、厨ふろで水仕事中に倒れた妻は、ついに帰らなかつた。寿蔵とは一九二四年に結婚、翌年長女玲子まきこ（成恵）出生、五十年余の寄り添つての暮しは、常に夫の陰にありその仕事を助ける日々。一九三二年、紙塑の技法は完成したが、その後の長い戦中戦後、生活に有用でないとの風潮で、経済的には不遇であつた。その間も決して不満をいわず、疎閑地では畑仕事もした。また労のみ多い歌誌の発行事務、会計、校正等、人形に、歌にきびしい夫を

補ってこまこまと気を遣う生活だった。

婦とふたり和紙染むるとこの年も寒のさ
なかに手は荒れ荒れぬ

『新冬』

見ぬふりをしつつおさへて老に入りかた
みに何も言はざりしなり

『花白波』

和紙（ワシではなくワガミと呼ばれた）は手漉純楮のもの、凡て
自染だった。また紙塑とはこの手漉純楮を白で搗ついたもの。どち
らの工程も妻と協同の手仕事だった。ヘトランジスタ婆ちゃんといふ
愛称を表情掣めくやしみたりしへきこえくるにくまれぐちを無視せ
むと黙をとるときにはげましし妻×アララギをほとんど夜毎読みし
が一言だにも口にせざりきん在りし日の夫人を偲ばれての作。自己
主張する女性を嫌い、優しく、あたたかい、ふつくらした女性を好
まれたが、それは、創作の人形にも表れている。ユーモアを愛し、
よきお酒を嗜まれた。典型的な明治生まれの九州の男だったといえ
よう。

人の身は消えゆくならひ墓石にこもれる
こころ我感らむとす

『花白波』

やぶかげにひとむら錆びて咲ける花はつ
ゆきおこし亡き妻の花

同

さみどりの清き蘭の芽見て逝きし汝に申
さむ花期の長きを

同

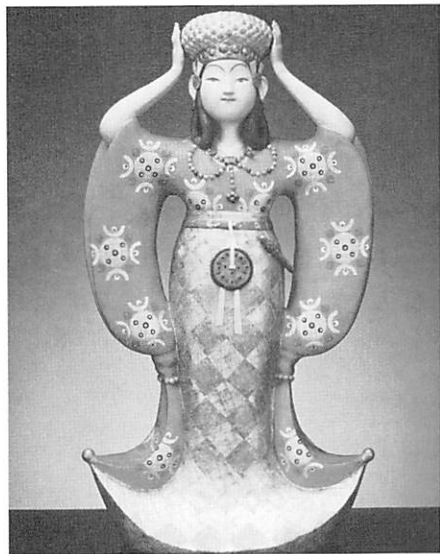
よもつへに入りたるものを叱るらく魂ひ
とり行くはよからず

『花白波』

この一首については山本健吉氏の名解釈を紹介しておきたい。
鹿兒島氏の歌は亡き妻の魂を描き出している。とほとほとひと
り、無明の闇を歩いてゆく姿を描き出す。よもつへ（黄泉）とは
そういうところだろう。この場合「叱る」の一語が悲しみと愛憐
の極みの表現となる。「ひとりで行く奴があるか、俺の手に掴まり
なさい。」現実ならこう言いたいところだ。慟哭の絶唱である。ひ
とりとなった老のかなしみが身に入みる歌である。

『雪月花の時』より

寿藏の人形「卑弥呼」は殊更の名品であるが発表された当時、私
たちは「やすほ夫人」の面差ねとささめきあい、それを当然のこと
と喜びあった。へあやまり状入れねば髪は刈らぬといふ妻を待ちをり
エプロンかけて 寿藏×帰宅遅きを危ぶみ気遣ひ寝もやらず待つ気
持などわかつて
はくれぬ やす
ほ～日常が見え
てほほえましい
二人の作である。
夫人は木草や小
動物をいとおし
み、花の開花記
録、鶏にココ、
チイなどと固有



卑弥呼の像（昭和41年制作、高さ23cm）

名詞をつけての産卵記録をつけるなど、また、手先仕事の手際の良さなど、夫人あつての寿蔵であり、紙塑人形であつた。

仔猫育む猿の優しき写真ありベトナム戦
争などどうして止めぬのか

鹿児島やすほ

もの汚すことなくしづかに死にゆきし猫
のごとくに死にたしとおもふ

同

一生、静かに夫の陰で歌い続けた夫人は、その願いどおり、汚さ
ず静かに亡くなった。

朝がたの星の光はうれしけれど頭の中は
空疎と言はむ

『朝と夕以後』

わが口の動きやうやく読みとらせ拙き歌
をアララギに五首

同

病みながら心はうたを詠みてゐる今このう
つろを子らに伝へぬ

同

そこにある文字二重に見えをりて吾むな
しきに近づくものを

同

わが庭の福寿草の花開きたりかくてめぐ
れる春にあひたり

同

死の床での作。一生最後の歌が明るい福寿草であることに救われ
る思いがする。一九八一年十月三日、脳虚血症にて入院、左半身麻痺、

鹿 児 島 寿 蔵

十六日再発作により右半身も麻痺した。一時快方に向うが、ついに翌年八月二十二日、急性肺炎のため死去。入院以来、一切の面会を拒否し続けたのは、芸術家としての美学に起因していたのだろうか。

「潮汐」の会員は山形県上山市で夏期大会を開催中、そのさなかの師の訃報、まさに会員は一堂に於て、肅然と悲報を受けたのであつた。盲いた母が常に脳裡にあつた寿蔵は早くから角膜炎登録をしてあつたため、死の直後に提供している。主宰誌「潮汐」は寿蔵一代限りの遺志により、その年、十二月号をもって終刊となつた。

紙塑人形は遺子、鹿児島成恵とその子寿規に引き継がれ、先般、鹿児島成恵展が開かれた。

短歌は、旧「潮汐」会員により「群緑」（第九歌集名）として継続され、新会員が加わつて後も、師風を尊び順調に発行を続けている。



福岡市櫛田神社の歌碑の前、右は娘・成恵（昭和55年）

（あさの・まりこ「群緑」会員）